

北伐時の郭沫若（続）： 広東大学における郭沫若の活動に関する考察

武, 継平
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5504>

出版情報：言語文化論究. 17, pp. 53-69, 2003-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

北伐時の郭沫若（続）

—— 広東大学における郭沫若の活動に関する考察 ——

武 継 平

はじめに

2002年7月九州大学発行の『言語文化論究』No.16に掲載した「北伐時の郭沫若」という題の論文の中で、わたしは五つの面（一、北伐に参加するきっかけ；二、郭の共産党入党問題；三、北伐準備期の郭の活動；四、郭の国民党入党問題；五、郭と北伐軍総政治部）に関して考察を行った。しかし、それはあくまでも郭沫若と北伐戦争—20世紀20年代に国共両党の合作による軍閥掃討の国内戦争——との関わりという事前に設定したテーマに着眼したもので、彼が広州に着いてから北伐軍に入隊するまでの、国立広東大学の文系院長としての活動に関しては、殆んど触れなかった。そこで、それらのことを小論で逐一考察することにする。1985年人民出版社出版の影印版『広州民国日報』（1923—1929）、1983年上海教育出版社が出した『中山大学校史』（1924—1949）を基本資料とするが、関わりのある人物に関しては、第一次資料が少ないので、手元にあるものだけ利用して検証をしたい。『広州民国日報』は出所を示すところでは、「××月××日『日報』」と略す。

一、 郭沫若らを招聘する広東大学の背景

(1) 創造社同人たちはなぜ広州に行ったのか

郭沫若をはじめ、創造社の主力同人たちが1926年3月18日に上海を發つて広州に行った、ということに最初に触れたのは『創造十年』であった。きっかけは「上海文芸の一瞥」という魯迅の講演に対する反発だが、魯迅が文学研究会と論争する創造社同人のやり方が「才子プラスごろつき式」（才子加流氓式）で、もともと文学を商品として作って行けないし、上海で創造社出版部を立ち上げ、独立していてもやって行けない、そこで「自然と比較的希望のある‘革命策源地’の広東」に活路を求めに行つたと揶揄したのに対して、郭沫若はそういう魯迅の指摘が事実無根だと強く反発したのである¹⁾。

実を言うと、創造社同人たちは必ずしも全員日本留学から帰国した後上海に集まって専ら文学研究会を相手に喧嘩腰で大暴れをしていたわけではなければ、文学作品が売れなくなると、今度は仕方がないから広州に行って革命でも起こしてみるか、というわけでもなかった。第一、彼らは帰国後それぞれ各地の大学の教職についていたからである。郭沫若は上海に新設された学芸大学の文系主任（国文教授、月給150元）、大夏大学の文学概論非常勤講師²⁾、郁達夫は安徽省の公立法政専門学校から北京大学、武昌大学（統計学教授）、成仿吾は広東大学、張資平は武昌大学（鉱物学教授）でそれぞれ教鞭を執っていた。彼ら（張

資平を除く)は広東大学学長から正式に招聘され、そして何回も赴任を催促された後広州に赴いたわけで³⁾、そもそも数多くの知識人と同じように、対外的には帝国主義列強たちに媚びへつらい、対内的には自由を封殺する北京軍閥政府に絶望し、そして以前から孫文が広州で作りに上げていた国民革命新政権に憧れていた。夢を持って新天地に向かうのはごく自然な成り行きであった⁴⁾。創造社出版部上海支部の発足には立ち会えなかったものの、広東大学の教職に就いたからといって、彼らは創造社同人としての活動を停止したわけではなかった。なぜなら、26年2月から4月まで北京、武昌、長沙、上海、そして広州に創造社出版支部が次々に発足した裏には、彼らの綿密な計画と遠隔指導が欠かせなかったはずだからである⁵⁾。

(2) 広東大学はなぜ郭沫若らを招聘したのか

26年3月20日付『広州民国日報』の「上海から郭沫若の電報を受け取った、郭氏は近日広東に着く」という記事は、郭らが電報を打った日に上海で客船「新華号」に乗ったこと、そして成仿吾がすでに一足早く広東大学に着任したことを伝えている。郭本人によれば、上海出発の日を3月18日にしたのは、「三・一八」がパリコンミュン創立記念日という特別な日だからという。(『創造十年・発端』)。さらに、「広東大学学生たちが郭沫若を歓迎する」を題とする3月26日付同紙独占インタビューの記事によれば、郭ら一行が広東大学についてのは23日だった。

では、広東大学は何故突然上海で活躍中の、創造社のリーダーである郭沫若を文系の長に迎えることに決めたのか。事実上、それは郭本人でさえよく知らなかった。ただ26年1月に上海で気が合う瞿秋白とロシア文学やトルストイなどについて語り合った後、瞿秋白が広東に戻り、国民党中央執行委員会委員という要職にいる林伯渠を通して郭沫若のことを、広東大学学長代理を務めていた陳公博(同じ国民党中央執行委員会委員)に推薦したのだろうという推測しかできない⁶⁾。一方、大学側が郭に打診する時、本当にわたしを招聘する気があるなら、武昌大学の教職を辞して上海に戻ってきたばかりの郁達夫やフランスから帰国してまだ職に就かない王独清という創造社の仲間も招聘してほしいと強く要求した。こうした郭の些かもったいぶった要求をそっくり吞んで、郁達夫ならともかく、王独清のようなまったく知名度のない人物にも文系教授職を与えたのは、当時の国立広東大学が相当人材に飢えていたのか、それともどうしても郭沫若に来てほしい何かの理由があったにちがいないと思われる。

調べたところ、当時郭沫若らを招聘するに至るまでに、広東大学では、学長人事の混乱や教授集団辞職事件など相次いで起きていた。郭沫若を招聘する理由を見つけるために、それらのことを避けて通れないので、触れることにする。

まず、広東大学の沿革に触れてみる。

孫文は1923年3月に広州で「大元帥府」を設立し、翌年二つの教育機関の設立を命じた。一つは「武学堂」としての陸軍軍官学校(1月24日大元帥令)、即ち黄埔軍官学校のことで、もう一つは「文学堂」としての国立広東大学(2月4日大元帥令)のことである。後者は新設というより、国立広東高等師範学校(1905年創設)、広東公立法科大学(同年創設)と広東公立農業専門学校(1909年創設)の三校を合併して国立広東大学という名に改めたものである。広東大学設置準備委員会主任に任命されたのは国民党1全大会(同年1

月20日広州開催）で中央執行委員兼青年部長に選出された元国立広東高等師範学校長の鄒魯という人物である。大学ができた後、早稲田留学時代から三民主義を唱える孫文に追随し、しかも深い信頼を得ていた彼は孫文自らの任命で初代の学長になった（24年6月9日）。しかし、国民党の元老派の一員である鄒魯は孫文の容共政策に反対していた。広東大学学長のみならず、国民党中央でも強い影響力をもつ彼は孫文が亡くなった25年革命政府によって組織された外交代表団の政府代表として北京に行った際、11月23日から10日間、一部国民党中央執行委員たちが北京西山の碧雲寺で召集した「国民党1期4全大会」（俗に「西山会議」と呼ばれる）に出席し、謝持、林森（外交代表団総代表）、張継、邵元沖、戴季陶らと15人の連名で国民党内の共産党員の党籍剥奪を決議するなど、孫文の連ソ・容共政策に公然と反対する反共宣言まで出したのである⁷⁾。この「西山会議」は非合法的なものとなされたため（当時の国民党の規定では中央執監委員合わせて51人の出席が必要であった）、鄒魯は結局、翌年1月1日広州で開催された国民党2全大会で党籍を剥奪される1ヵ月前に、国民政府政治委員会によって広東大学学長を解任されたのである⁸⁾。

25年12月1日付『広州民国日報』によれば、鄒魯の解任と同時に新しい学長の人事が決まった。2代目の広東大学学長には、李大釗の推薦を受けて北京大学文系教授の顧孟餘氏が正式に任命された（翌年1月に開催された国民党2全大会で中央執行委員会委員に選出）が⁹⁾、すぐには赴任できないということで、国民政府は着任までの間、同じ中央執行委員会委員で、国民政府農工庁長官である陳公博に学長代理を2ヵ月間兼任してもらうことにした。一方、鄒魯が大学を追われたあと、彼が網羅した一部の教授の集団辞職事件が起きた。開講の途中で起きた事件だから急に代わりの教師が見つからず、陳公博は頭を抱えていた。学校運営が極めて不安定のまま2ヵ月の代理期限を終えた陳公博は26年1月30日に政府に辞表を提出したが、受理してもらえなかった。顧孟餘の着任が依然として困難であり、代理の後釜もすぐには見つからぬということで、政治委員会は次の学長代理を探すためにあと1ヵ月務めるよう陳公博に要請したのである（26年2月3日『日報』）。

こうした政治問題が引き金となった学長罷免事件と教授集団辞職事件に加えて、学長の後任人事もなかなか決まらないことが学生たちの関心を一挙に高めた。25年12月から彼らは何回も学生大会や教師学生合同会議を開き、学長の更迭問題および教授集団辞職問題を議論し、そして代表を選出して国民政府主席の接見を要請し、汪精衛はわざわざ広東大学に足を運んで、学生たちの要求に応えるべく事情を説明した（25年12月2日～26年2月1日までの『日報』）。陳公博はもともと政界の人間で、国民党中央執行委員会委員、農工庁長官そして国立広東大学学長の三職を兼ねて実に多忙だった。彼が政治家の手腕を発揮したお蔭で、一時的に混乱な状態に陥った大学の運営は徐々に軌道に乗った。このような情勢の中で、彼にとって文系院長の人事を解決するのが焦眉の急となった。

鄒魯が大学を離れている間、校務は各学科の長が責任をもって協力しあっていた。二代目文系院長の陳鐘凡は鄒魯が網羅した人物で、鄒魯が解任された後、まもなく大学を辞めた。陳公博は学長代理を就任する際適任者がいないので、やむをえずみずから文系院長を兼ねていた。せめて辞める前に信頼できる人物を文系院長に迎えたいという陳公博の気持ちを、われわれは前に触れた26年2月18日付『広州民国日報』に公開された郭沫若ら宛ての手紙で十分読み取ることができる。その手紙は陳公博がなぜ大した大学教授の経歴も持たない文学者郭沫若のことが気に入ったのかを表明している。林伯渠がどれだけ働きかけ

たのか明らかではないが、結局郭沫若が適任者であるという認識をもったのも、少なくとも次のような二つの理由が挙げられるのではないと思われる。

一つ目の理由は、広東大学は国民革命時代の全く斬新な最高学府であって、文系の長としてはそれに相応しい思想をもち、しかも強い影響力を有する文学者でなければならぬと陳公博が考えていたからである。彼がみずから吐露したように、彼は郭沫若らの文学を読んでいるし、創造社の存在に対する理解もある。彼が思うに、広東大学はまさに郭沫若らのような革命思想をもつ情熱的な文学者を必要としている。

二つ目の理由は、前学長鄒魯の免職が誘因で起きた教授集団辞職事件のショックだと指摘しておきたい。郭沫若らの赴任を催促する手紙の中で、陳公博は次のような出来事に触れている。「広東大学を辞めて北京大学に戻ろうとする某教授から、わたしは哲学を教える者で、彼らの革命には関係ないと言われた。そして、某教授は、文学は革命と繋がりはない。わたしは革命よりむしろ読書を選ぶ、と言っている。(中略) われわれは思想を抜きにして哲学の話をするのができないのである。どんな国でも革命は必ず思想の変化によるものである」(26年2月18日『日報』)。つまり、大学教育でも学問や文学を革命と切り離して考えるべきという認識に陳公博は賛成しなかった。というより、むしろ大学教育にもっと革命思想を導入しなければならないと彼は考えている。学問に優れ、そして知名度が高くても、陳腐な考えしか持たない学究肌の人間なら、広東大学文系院長は決して務まるものではないと思っていたかもしれないのである。陳公博は学者というより政治家なので、そのような観点をもつのも無理がなからう。

われわれは陳公博が政治家であるということ忘れてはならない。彼は郭沫若を招聘することで、全国からより多くの人材が集まってくることを期待している。そこで彼は新聞に公開された郭沫若宛の手紙の中で、郭一人でなく、「全国の革命の中堅および革命思想をもつ学者たちが広東大学に来て、革命的な青年たちを指導するよう」と呼びかけたのである。

二、 教師集団ストライキ事件

広東国民革命政府が陳公博の辞表を受理し、1ヵ月後北京大学の顧孟餘氏がなお着任できないので、嘗て校務代理をした経験を持つ褚民誼氏を新たな学長代理に任命した(26年2月18日『日報』)。その1ヵ月後の3月18日は郭沫若が郁達夫(文系英文学部主任兼教授)、王独清(文系教授)と共に上海を発った日であった。彼らが4日間の船旅をして広州に着いた23日には、すでに着任した文系兼予科教授の成仿吾が港まで迎えに来ていた。陳公博はすでに広東大学を去り、そして同大学医学院長の褚民誼氏は新しい学長代理の椅子に座った。26年3月20日付中華民国国民政府令によれば、褚氏は広東大学学長の任命を受けると同時に政府教育行政委員会委員と国立中山大学設置準備委員会の責任者とも指名された。他の誰よりも広東大学のことに詳しい褚氏はのちに陳公博が招いた新しい文系院長の郭沫若と共に広州で大きな騒ぎとなった文系教師集団ストライキ事件に深く関わったのである。

幸い、当時広州最大のメディア『広州民国日報』が4月24日から6月16日まで10回に分けて事件の一部始終を報道していたので、われわれは長引いた事件の真相を知ることがで

きる。次に、事件を要約しながら郭沫若がいかに関わっていたかを見てみることにするが、文中の引用はすべて同紙によるものである。

ここで、まず広東大学の「文系院長」という職名について説明せねばならない。中国語の表現は元々「文科学長」となっている。前掲『中山大学校史』によれば、中山大学の前身、つまり広東大学には1925年7月以後、文、理、法、農、医の5科が設置されていた。中国文学、英国文学、史学、哲学および教育学の五つの学部と高等師範の文史、英語、社会の三つの部門がすべて「文科」に所属することになっている。さらに、当時の新聞では、広東大学「文科学院」や「医学院」といった表現はよく用いられていた。ここでは、大学の学長という表現と区別するため、敢えて原文の「文科学長」を「文系院長」に訳したのである。こう訳すことによって、われわれは少なくとも当時郭沫若が広東大学の文学部長ではなく、中国文学、英国文学、史学、哲学および教育学の五つの学部と高等師範の文史、英語、社会の三つの部門を統率する文系学院の総元締めであったと分かる。このポストは27年2月魯迅が務めた文学部長を意味する「文学系主任」と大きく違っていた。

郭沫若らが着任した5日後、広東大学では「全国的に名が慕われている革命文学者の郭沫若とその同志郁達夫、成仿吾三人を迎える」盛大な歓迎会が開かれた。文系改革の抱負はと訊かれるとき、郭院長は「着任早々、事情に詳しくないので褚学長と楊寿昌元院長と相談してから決める」と淡々と答えたという¹⁰⁾（3月26日『日報』）。

学生会主催の歓迎会で自己アピールを控えた郭沫若は、3月31日に広東大学で開かれた「五・三〇事件で亡くなった北京の烈士を追悼する」大会と4月16日の広州大学生連合大会ですばらしい演説力をもって学生たちの人気を集めた。広州に来るまでは作品を通して文学者の郭沫若を想像することしかできなかった大学生たちにとっては、目の前で講演する郭院長は大きな存在感を持っていた。

(1) 学生による授業評価と文系教師集団スト

郭沫若は文系院長就任後、中国の大学教育史上まさに前代未聞のシステム改革に挑んだ。その改革は学長および文系学生たちの絶対的な支持を受けたものの、広東大学設立以来の初めての教員集団ストライキ事件を引き起こす引き金ともなったのである。従来の郭沫若研究ではこの事件を視野に入れた報告があるものの、郭の行った改革の位置付けはされていないままである。小論は以下の考察の中で今までの不足を補いたい。

そもそも事の始まりは4月20日に文系キャンパス構内に掲示された文系院長署名の一枚の通知書であった。4月中旬、まともに授業できない一部の「不良教師」を解雇するよう、朱念民を代表とする文系学生が百人以上の署名を集めて郭院長を通して学長に嘆願書を提出した。郭院長はさっそく学生の意思を褚学長に伝え、そして直ちに対処すべく履修科目選択期間が過ぎたものの、学生たちが4月中に再度履修科目を選び直してよいという旨の改革を提案して指示を仰いだ。学生による授業の評価を試みるのは目的の一つであって、もう一つの目的は履修者が全くいない授業の担任教員に今一度身の進退を考えるチャンスを与えることであった。言ってみれば、一種の文系院内規定の改正であった。この改革案は学長の同意を得て4月20日に正式にその決定が文系キャンパス内に告示され、学生たちに大いに歓迎された。ところが、それは一部の教員の猛反対を受けたのである。4月20日当日、黄希声をはじめとする26名の文系教員は褚学長宛てに声明を発表し、文系郭沫若院

長が校規を無視した上、同僚全員を侮辱したと訴えて、直ちに彼の文系院長職を罷免し、そして大学から追放せよと陳情する傍ら、文系教員の集団ストライキを宣告したのである。

履修科目の再選択という改革案が実施される前に起きた教員ストに大学側、国民党広東大学特別支部および学生自治会の三つの方面から直ちに反応があった。緊迫していた空気の中で学生たちの反応は最も早かった。教員ストライキが始まった翌日、文系キャンパス内にはあっちこちにポスターや張り紙などが出現した。「ストライキを煽り立てる穀つぶしを追放せよ!」「西洋の真似をするキリスト教徒といい、陳腐な旧時代の教師といい、能無しならすべて打倒せよ!」のような過激な表現もあれば、「今回文系の教師選択運動は良い教師とは関係がない!」といった冷静さを保った学生たちの声もあった。一方、国民党広東大学支部は22、23日文系、予科学生緊急合同会議を2回も召集し、教員ストライキ事件への対応を論議し、今回の履修システムの改革は大学改革の一環だけでなく、青年運動にも関わる重大なことであるため、党としては、褚学長と郭院長の果敢な文系部内改革を全面的に支持する決議を採択したのである。さらに、こうした学生の運動は斬新な気象の現れと見なされ、国民政府青年部からも声援を受けた。しかし、大学当局から見れば、このまま手を打たないでいると、26名の教員ストライキ事件はまったく収拾もつかない学生運動の引き金になりかねない。無論、このような局面は決して好ましくなかった。そこで、学校の安定を図るため、褚学長はストライキを実行した26名の文系教員を集めて会を開き、文系郭院長の名義で告示した履修科目の再選択改革案がすべて学長の同意を得たもので、校規に反するものではないと大学教育システム改革の意図を説明したのである。しかし、黄希声をはじめとする26名の文系教員は学長の説明を聞き入れず、人格が侮辱されたので、院長郭沫若をくびにしないと絶対に妥協しないと宣言した。事態がますます深刻化する一方であった。

(2) スト発生後郭沫若の対応

このような学長を挟んだ対立の中で、郭沫若は終始冷静に対応しようとしていた。彼は文系だけでなく、大学全体の機能マヒこそ相手が描いた最悪のシナリオだということを察知した。その実現を避けるように、彼は学長に報告すると同時にストに参加しなかった55名の文系教員を部内緊急会議に召集し、授業を放り投げた教員の担任科目の臨時分担を振り当てたのである(4月26日『日報』)。

教員スト事件が発生した4日後、文系学生全体会議が再び開かれ、「文系改革委員会」が組織された。その結成宣言の中で、学生たちは次のように郭沫若院長の対応を評価している。

「陳鐘凡元院長と一部の教授が辞めた後、わが文系は本当に無秩序な状態になった。ようやく大学当局は郭沫若先生を新しい院長に迎えた。まるで暗闇の中に希望の光が射したようである。われわれは郭院長の文系改革に大きな期待を持っている。しかし、こともあろうに、一部の教員はその改革に反対し、ストライキを起こして郭院長の免職を強要している。(略)学校にはよい教師がいなければ、そもそもいい学校とは言えない。教師がいなくても学生を指導できなければ、われわれの時間を無駄にするだけだ。われわれはまさにその故に署名運動を起こし、文系院長に「不良教師」の辞退を要求したのだ。郭院長の改革案はわれわれに今一度履修科目を選択するチャンスを与えてくれた。それが極めてよい改

草案で、決して他の教授たちの人格を傷つけるようなことはなかった。（略）

同宣言の中で出された学生たちのスローガンは「学識のない能無し教員を追放せよ！大学の改革に努める褚学長と郭院長を支持する！学識豊かな教授たちを擁護する！」であった。日々益々盛んになる学生運動はストライキをやっている教師にとっては、ある意味では思うつぼであった。このような大学の秩序の乱れが彼らの狙いの一つであった。彼らは学生運動という大学当局が最も怖い武器を利用して郭院長を罷免させようとした。このような情勢の中で、第一回仲裁が失敗に終わった後の大学当局の優柔不断な態度も事態をより深刻化させた要因の一つである。大学当局は当初郭沫若の改革案を同意したものの、その実行がストによって阻まれた時から改革の続行を支持しなかった。大学当局が教員のストライキよりもっと恐れていたのは学生運動であった。このような情勢の中で、郭沫若はついに沈黙を破り、学長に自分を主張する手紙を出した。『郭沫若書信集』（1992年12月中国社会科学出版社）にも収録されたこの手紙と褚学長の返事はいずれも当時のマスコミに公表されたので、全国大学関係者の注目を集めたのである。

郭が言うには、「彼らは教師のくせに、青年たちに認めてもらえなかった。勝手にストライキを起こし学生たちの貴重な時間をむだにする彼らの行動こそ校規違反、教学妨害ではないか。調査で判明したことだが、本学期我が文系の開講科目には、商業学校の簿記など中学校のレベルしかないものがある。履修者は最多4名に至らず、講義内容も笑いの種になるものばかりだ。このような教員がいるからには、どうして学生たちは我慢することができよう。実際にも学生たちから何度も教師を替える声があった」。このような「彼らは学長の意見や自分の弁明にも耳を貸さず、勝手にマスコミを操って善悪を転倒し人の目を惑わす。大局をまったく顧みない彼らの意図的な教学妨害活動に対して、これ以上目をつぶることが出来ない。」「自分は大学の要請で広州に来た以上、教務の改革に微力を尽くそうと思っている。しかし、何故か自分に敵意を持った彼らはいつも教務執行を妨害し、ことにつけて些細なことを大げさにし、また事実を捻じ曲げようとする。彼らとはもう二度と一緒に仕事をしたくない。」そして、「もし自分が間違ったら、必ず全校に謝罪する。そしてその責任をとって辞職することはいうまでもない」。

無論、郭沫若は自分の改革案の正しさを信じて学長に圧力をかけたのであろう。この手紙が広東最大の新聞である『広州民国日報』に掲載された後、広東大学全校で反響を引き起こし、学生たちの自発的な「文系郭院長の辞職を阻止する運動」の誘因となったのは誰も予想できないことだった。ストライキ事件が発生して一週間、大学側が迅速に処分意見を出さなかったために、事態が文系の領域を越え、たちまち全校に広がった。マスコミもそれに乗じて大騒ぎをしていた。これ以上沈黙を守り続けると、文系で起きた事件が更なる大規模な学生運動になりかねないと見て、国民政府教育委員会は4月27日に「大学授業ボイコット禁止条例」の修正案を可決し、大学生は国民政府や大学が決めた休暇以外は勝手に授業を休んではならない。そして各界を聯合して学生運動を行う際、教育行政委員会および各地の最高教育行政機関の批准が必要である。さらに学内での平日の集会も必ず学長の同意が必要である、というふうにより事実上全面的に学生運動の鎮圧に乗り出したのである。

こうした政府の動きがストライキをやっていた文系教員の気炎を助長した。彼らはさらに事態の拡大を謀り、法、理、農、医、予科五つの部局の教員と次々に連絡してさらなる

規模の合同ストライキを準備しはじめた¹¹⁾。事件発生以来、学長という立場で仲裁役を演じざるを得ないので郭沫若に些かがっかりさせた褚民誼学長代理はついに決断を下して、教員処分意見を政府委員会に提出した（「ストライキに参加した教員の行政処分願い」5月3日『日報』）。

4月28日、またも学生たちの行動がきっかけで事件が一挙に解決に向かった。

その日、褚学長は文系学生全員署名の陳述書を受け取った。それによれば、ストライキに参加した26名の文系教員の中に石光瑛をはじめとする11名の「良い教師」が唆されていたことが判明したので、彼らに仕事に早く復帰するよう説得してほしいということだった。褚学長はさっそく郭沫若にその趣旨を伝え、そしてその11名の教師一人一人に一時も早く大学に戻って授業を再開するよう要請書を出すように命じた。郭沫若も即座に学長命令を実行した。4月30日の『広州民国日報』はその11名の教師が郭院長の丁寧な要請書を受け取った後すぐに学校に戻ったと伝えている。

広東大学文系教師ストライキ事件の騒ぎは22日間続いて、5月12日になって国民政府委員会から出された最終決裁命令の執行で一件落ち着いた。政府の決裁書はすべて褚学長が5月3日に提出した「ストライキに参加した教員の行政処分願い」を承認する形で出されたものだが、結果的には、政府は25年11月16日に発布した公務員ストライキ禁止条例を根拠にストライキに参加し、最後まで仕事への復帰を拒否していた15名の文系教員全員に解職処分を言い渡したのである。

(3) 教務改革と郭沫若の悲哀

郭沫若は15名の部下と最終的に和解することができなかった。事件解決に至るまで絶えず人身攻撃、そして、一時は広東省教育会評議会からも圧力を受けていたものの、文系院長の郭沫若はマスコミが騒ぎたてる中で大学教育改革の英雄人物の名声を得たのである。

文系教師のストライキ騒ぎ事件がおさまった後、国民党広東大学特別支部は新聞に公開状を発表し、郭沫若院長が行った教務改革、および学生の支持運動が「(一) 青年自身のための運動、(二) 中山大学の建設を実現させる運動、(三) 反動派打倒の運動である」と高く位置付け、そしてそれが青年革命化のシンボルとして広東各学校に影響を与えたと指摘している（「広東大学文系学生運動の影響と党部の役割」、6月16日『日報』）。

26年6月19日、国民政府は国立広東大学の名前を国立中山大学に改名するという廖仲愷（国民党中央執行委員会常務委員）の生前の提案を受けて、時の広東大学学長代理褚民誼、政府農工庁長陳公博、国民革命軍総司令官蒋介石（26年6月7日中華民国国民政府令任命）、広東大学文系院長郭沫若など40人からなる中山大学設置準備委員会委員を任命した。この任命のおかげで、郭沫若の名前ははじめて政界の要人たちと並ぶようになった。しかし、彼は結局、教育界の首脳の一人として出世するチャンスを放棄して大学を離れることにしたのである。従来の研究では、彼が広東大学を去ったのは北伐に参加するためだというふうに認識されていたが、しかしそれは重要な原因であっても唯一の原因ではなかった。ここで、わたしはもう一つの内なる原因を指摘しておきたい。それは22日間に亘る文系教師集団スト事件で受けたショックである。郭沫若は誰よりもよく分かっている。事件は最終的に相手の解雇処分が終わったが、学生たちを除いて、上司にも同僚にも彼の改革を終始心から支持してくれる人はいなかった。事実上、彼が行った文系の教務改革は最初から反

対され、ボイコットを受けた。そして事件解決後もその改革を続行することが出来なかった。それは彼にとって何よりも悲しいことだった。なぜなら、彼は事件を通して改革の英雄の名声を得たとは言え、改革は成功しなかったからである。

26年7月21日、郭沫若は広東大学文系院長を辞して北伐軍に入隊した。その院長の職務を引き継いだのは26年ドイツから帰国したばかりの正統派学者傅斯年である¹²⁾。翌年の1月魯迅も招聘されて、2月1日には部局改組後の文学系主任兼教務長に就任した。

26年8月17日、郭沫若が国民革命軍総司令部政治部宣伝科長として北伐軍第一軍と共に湖南省平江県の県城を攻略したとき、広東大学を国立中山大学に改名する政府令が発表され、大学名の英訳も同年11月に「Sun Yatsen University」に決まった¹³⁾。26年広東大学改組が始まった時点で、政府は同年1月の国民党2全大会で第2期中央執行委員に選出された戴季陶という人物を中山大学初代学長に任命していた。

三、 中山大学校歌と郭沫若

今回『広州民国日報』などを辿って広東における郭沫若の活動を考察した成果がもう一つある。それは郭沫若がまだ中山大学設置準備の段階で大学の依頼を受けて作詞した「中山大学校歌」を見つけたことである。1926年4月27日の『広州民国日報』にある関連記事では、「設置準備が始まって月日がだいぶ経つが、中山大学はいよいよ誕生する。現在、郭沫若先生に、わざわざ次のような校歌を作成してもらった」と伝えている。このことは『中山大学校史』、『郭沫若年譜』および同大学現在の公式ホームページにある「校訓校歌」のいずれにもまったく触れられていない。校歌に関しては、前掲『中山大学校史』には作詞作曲も分からない一枚の楽譜の口絵しかない。現在のホームページには「中山大学校歌」の画像も解説文も見ることができるので、ここで三者を比較して郭沫若作詞したのがどんなものかを見てみよう。

まず『中山大学校史』に収録された作詞作曲不詳の「校歌」を見よう。右側は現在の中山大学公式ホームページに掲載されている現在の「校歌」である。



原物画像が判読しにくいので、次のように両方の歌詞だけを左右に並べてみた。

此乃吾校之真銓
此乃吾校之真銓

此レコソ吾校ノ真銓
此レコソ吾校ノ真銓

（三）

中原之中中山大
扶植桃李滿天下
博審慎明還篤行
唱導三民主義濟民生
此乃吾校之光荣
此乃吾校之光荣

中原ノ中ノ中山大
桃李ヲ扶植シテ天下ニ滿ツ
博審、慎明、還夕篤行
三民主義ノ唱導民生ヲ濟ウ
此レコソ吾校ノ栄光
此レコソ吾校ノ栄光

形の整った七言(三連にも九言の句が一つあるが、全体的に見ると不規則とは言えない)のリズムはまず鄒魯の四言の古風な歌詞と明らかに異なっている。曲にもよるが、実際に歌う時のテンポもかなり違うだろう。しかし、歌詞の内容をざっと見ると、おそらく誰でも、いかにも酒がそのままだが、瓶だけはデザインの新しいものに変ったといった印象を受けずにはいられないだろう。推測に過ぎないが、恐らく元の校歌を彷彿させないように意識して作ったのであろう。もともと詩人だった郭沫若にとって、作詞はそれほど難しいことではなかったはずだ。しかし、元の校歌は曲といい、歌詞といい、いくら郭沫若でもけちのつけようがないくらい完璧に近いものだった。それが中山大学の校歌として相応しくなくなったのはたまたま歌詞の執筆者だった鄒魯が「西山会議」派で、当時の広東国民政府と敵対的な立場にいたからであった。元の歌詞はたったの一連くらからしかなく、「三民主義ハ四方ノ儀型、民国ノ基礎、大同ニ梯航ス」や「博学審問、慎思 罔ズ、明辨篤行、国ノ棟梁」、また「勉旃、懿ナルコト歟、墮スル勿 忘ルル勿」といった孫文の教育思想が分かりやすい。しかも、「白雲山」や「珠江」のような歌詞が美しい自然に囲まれた中山大学の地理的環境を示し、中山大学に恵まれている地元広東人の誇りさえ感じさせてくれる。

では、郭沫若の詞はどうだろうか。まず、歌詞の主旨を見てみよう。

「三民主義唱導ノ民族」や「民権ヲ重ンズ」、「民生ヲ濟ウ」といった言葉は鄒魯の歌詞に比べると、三民主義の主旨をより具体的に反映している。そして、広東大学の創立者である孫文の教育思想といえば、「博審、慎明、還夕篤行」のような校訓がほぼそのまま歌詞として使われている。さらに、「白日晴天滿地ノ紅」の「白日晴天」は「青天白日」にも取れるので、国民党が主力で行う国民革命の新風が中国全土にあまねく吹き渡ることを讃えている¹⁵⁾。

ところで、校歌を作り直す折角の機会なのだから、性格からいえば、当時の郭沫若は孫文の言葉を歌詞に並べるだけでは決して満足できる男ではない。郭から見れば、初代学長の鄒魯は政治闘争の中で失脚したとはいえ、彼の書いた歌詞は決して悪くはない。それでも歌詞を変えなければならぬのだから、何か普通の人が考えつかない「光り輝かしいもの」を入れないと、はっきり言って、意味はないのである。わたしはこのような人々に強いインパクトを与えるのに仕掛けられたものを仮に「郭沫若的なもの」、或いは「郭沫若らしいもの」と名づけるが、それこそ郭沫若研究を行うときにもっとも注目し値するとこ

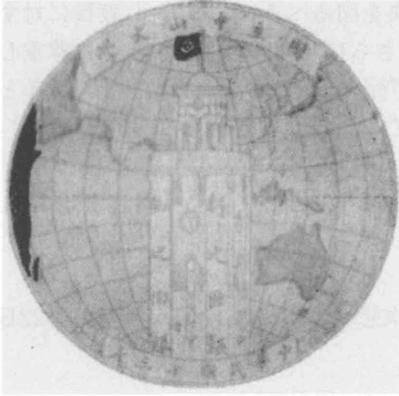
ろではなからうか。

思うに、この歌詞の中で、第二連にある「新興文化ヲ先鋒トス」と「行フハ艱キニ匪ズ知ルコソ艱シ」の二句がこうした「郭沫若的なもの」、或いは「郭沫若らしいもの」として注目すべきである。前者は他の大学と違って、国民政府の下にある中山大学で斬新な学問を教えていることを強調したのだが、後者は明らかに『書経・説命』にある「非知之艱、行之惟艱（之レヲ知ルコトノ艱キニハ非ズ、之レヲ行フコト惟レ艱シ）」という傳説の言葉のパラドックスである¹⁶⁾。傳説の言う「非知之艱、行之惟艱」とは、これを知ることが困難ではない。知ったことを実行するのが難しいのだ、というふうに今まで解釈されてきた。しかし、「知ること」は道理を知ること、または知識をもつことを意味するならば、郭沫若の言う「匪行之艱知之艱」というのは、「言われる通りに行動するのが困難ではない。何故そうしなければならないのかを知ることこそ難しいのだ」と解釈すべきであろう。校歌を作るための作詞だから、知識や教育こそ何よりも重要だと訴えるのは当たり前といえ、当たり前だろうが、それにしても、従来の定説を覆して全く新しい思想を言い出すような奇想天外な発想はいかにも郭沫若らしい。「行フハ艱キニ匪ズ」と取えて言い出すからには、これは何千年も言われてきた「之レヲ知ルコトノ難キニハ非ズ、之レヲ行フコト惟レ艱シ」の思想に対する懐疑と否定と見てよからう。

さらに驚くことに、この言葉は中山大学発足時の校章にも刻まれている。前掲『中山大学校史』に掲載された同校章には、「中華民國十三年」という文字があるものの、「国立中山大学」と称するからには、どんなに早くても中山大学設置準備開始以後に作られたものでなければならない。つまり、民国十三年の時点で同校章が作られた可能性はまずない。わたしはむしろ中山大学設置準備委員会委員である郭沫若が当時校章のデザインに関与していたと考えたい。同校章は中山大学の美術教師姚友毅氏がデザインした今の校章とかなり異なる（両方の写真をご参照ください）。シンボルである白い鐘楼は両方にもあるが、古い校章は地球の真ん中に鐘楼があり、鐘楼の頂には「国立中山大学」の六文字があり、その下に青天白日の国民党の党旗が翻っているというデザインである。さらに鐘楼の正面には「行之匪艱知之惟艱」、左右四文字ずつ縦書きに刻まれている。ちなみに、校章にある鐘楼は即ち現在の広州市魯迅記念館となっている。調べたところ、正面には「行之匪艱知之惟艱」という八文字は刻まれていない。

ところが、郭沫若が作った歌詞の中の、「浩然タル正気此ニ長ク存ス」、「霹靂一声天下ハ驚ク」、「風雲ヲ叱咤シテ大陸ヲ巻キ」、「中原ノ中ノ中山大」、「桃李ヲ扶植シテ天下ニ満ツ」といったような歌詞は気迫を充分感じるが、具体的なイメージをもたないので、空回りする感じがしないでもない部分もある。それに、各連の最後の句がリフレインとなっているので、全体的には冗長さみである。これだけボリュームのある歌詞では、元の曲には収まりそうもない。おそらく作詞を郭沫若に依頼したのと同じように、作曲も他の誰かに頼んだのであろう。郭沫若が作詞の依頼を受け、そして完成品として発表したのだから、それに合う曲がないというのはむしろ話の辻褄が合わない。ただその曲の存在を立証できる資料がないので何ともいえないが、新しい曲はすでに作ってあったのか、それとも新たに作る予定であろうとしか推測できない。

広東大学文系院長だった郭沫若によって作られたこの中山大学の校歌の歌詞は76年間も眠っていた。というより、郭が中山大学の校歌を作ったということさえ知る人はいない。



中山大学発足時の校章



現在の中山大学校章

四、『郭沫若年譜』補遺

次は『広州民国日報』から探し集めた広東大学時代の郭沫若の足跡である。『郭沫若年譜』には触れていないことなので、その補遺とする。

26年4月15日

広州学生連合会主催の全国各地の学連代表を歓迎する会に出席。「辛亥革命，黄花岡事件¹⁷⁾および北京で起きた事件の数々から見れば，大学生の力はすでに頭角を現した。第一線にいる農民や兵士は，まさにわれわれ知識人の指導を必要としている」。「われわれの大学生たちに全員武装して敵の陣地に突撃し，帝国主義と軍閥の殺戮に反抗して，我が中華民族を解放する学生軍になってほしい」と演説した。（26年4月16日『日報』）

26年4月26日

文系教員ストライキ事件が深刻化。黄希声をはじめとする一部の文系教員は一徳路246号の建物の中で集会し，予科、法、理、農、医学部の教員にも郭沫若反対運動に参加するよう要請した。しかし，殆ど参加者から同意を得られなかった。同日，国民党中央党部では郭沫若を告発する張道深などの報告が審理される。陳公博が出席。「直ちに調査を行い，真相を明らかにした上で問題を解決せよ」と広東大学学長に指示した。（26年4月27日『日報』）

26年4月27日（？）

中山大学設置準備の一環として校歌の作詞依頼を受け，それを完成させた。

（26年4月27日『日報』）

26年4月29日

郭沫若の文系教務改革とそれに関連する教員ストライキ事件に関して，広東大学文系改革委員会は三つの「しない」を主旨とする宣言を発表。「（一）褚学長と郭院長の改革計画を妨害しない。（二）不良教員を引き止めない。（三）褚学長と郭院長が困って辞職するようなことはさせない。」

同日，広東省教育評議会では，彭堯祥等26名の関東大学文系教員の郭沫若に対する告発が審理された。同評議会は国民政府最高行政機関である教育委員会に審理結果を報告し，

「不良教師がいたとしても校規を基準にして解決を図るべきであって、」教員に対する評価も「教員待遇規程に従わなければならない」、さらに「教師と学生は互いに尊重しなければならない」という審理意見を出し、郭沫若が行った学生による授業評価の改革とその改革に対する学生側の全面的な支持に異議申し立てをした。(26年4月29日『日報』)

26年5月中旬

広州民間劇団が時代劇『王昭君』を上演する。原作者として舞台挨拶をする。(26年5月10日『日報』)

26年5月22日

広東大学大講堂で開かれる同大学童子軍第二次懇親会に出席する。(26年5月22日『日報』)

26年5月29日

甘乃光、黎樾廷、陳公博、何香凝、褚民誼らと共に広東大学専修学院国民党支部発足大会に出席、そして講演を行う¹⁸⁾。(26年5月25日『日報』)

26年6月3日

広東大学夏季講習班第一回学務会議に出席、教務担当に選ばれる。(26年6月4日『日報』)

26年6月4日

国内初の孫文総理記念写真集が広東大学によって出版される。譚延闓、陳公博、褚民誼、郭沫若などが記念のことばを書く。(26年6月4日『日報』)

26年6月6日

広東大学卒業式に出席、そして講演を行う。(26年6月7日『日報』)

26年6月23日

広東大学大講堂で開催される「沙基事件」記念大会に出席、そして講演をする。「悲しむあまり、講壇の前で泣き出してしまった。会場は厳かな雰囲気にも包まれて、出席者一同は全員泣いた」¹⁹⁾。(26年6月23日『日報』)

26年6月26日

国民革命軍総司令部政治部の戦時工作会議(三日目のみ)に出席。同部主任の鄧演達が司会。総司令官の蒋介石が講演する。共産党幹部の参加者は周恩来、林祖涵、惲代英、李富春等。広東大学学長代理褚民誼も出席した。(26年6月26日『日報』)

26年7月21日

北伐開始。国民革命軍に入隊して広州を發つ。

五、終わりに

1926年の3月から7月までのおよそ4ヵ月の短い間、郭沫若は広東大学の沿革史に名前を残すような教務改革を行い、その後また校歌の歌詞を作るなど、中山大学の設置準備にも彼なりに貢献した。学生たちから多大な支持を受けたにもかかわらず、彼は改革が挫折したことで大きなショックを受けたが、反対派勢力と最後まで闘った。そうした中で、彼は冷静な判断力と強いリーダーシップを発揮し、僅か4ヵ月の間で文学者でない人柄のもう一つの側面を見せたのである。当初陳公博はまさに郭のそういう性格や行動力に目をつ

けて彼を遥々上海から広東に呼んできたのかもしれない。そういう意味で、郭沫若は期待された役目を十分果たしたといっても過言ではないだろう。彼が大学を辞めて北伐に参加したのは幾つかの要素があろうが、それはあくまで彼自身の信念を貫くためであって、自分の可能性を最大限に伸ばす彼らしい行動であった。結果的には彼は軍隊で新しい自分を見つけることに成功したのである。彼は文学者または学者であり、軍人であると同時に政治家でもあった。広東大学を辞めたが、学者としての人生を決して諦めたわけではなかった。1928年日本に亡命したときから再び学問の聖地に足を踏み入れ、そして史学の分野で多大な貢献をしたのである。

注

- 1) 「上海文芸の一瞥——八月十二日，社会科学研究会で講演——」竹内好訳。『魯迅文集』第5巻筑摩書房1978年1月。
- 2) 1926年6月26日付『広州民国日報』に公表された政府教育行政会によって認定された「大学教師資格および給与条例草案」によれば，国立大学の教授職は三等級に分かれ，給与も500元，450元，400元となっている。それまではいくらだったか知らないが，広東大学から中山大学に成長していく中で絶えず財政難に悩まされていたのだから，短期間で大幅な賃上げはまずないと思われる。となると，一家五人を抱えていた「貧乏男」の郭沫若にとって，上海学芸大学の150元の月給と比べれば，広東大学の教授職は願ってもなかつたと言えよう。
- 3) 当時の招聘状は未見。しかし，26年2月3日付『広州民国日報』には「郭沫若を文系院長に招聘す」というタイトルで，次の記事が載っている。「調べによると，郭氏は日本九州帝国大学医学士卒で，帰国後文芸創作に従事している。その作品の良さは誰一人，知らぬ者はいない。他に後成仿吾，田漢，鄧均吾のような革命精神を有する文学作家および評論家も次々と広東大学の教授として着任しに詰めかける云々。」さらに，2月18日の『広州民国日報』には広東大学代理学長陳公博が2月10日付で郭沫若と田漢二氏の赴任を催促する書簡が掲載された。
- 4) 結局，創造社同人たちの南下をからかった魯迅自身も27年1月に中山大学文学系主任の招聘を引き受けて広州に赴いた。『広州民国日報』は27年1月27日と2月7日二回に分けて附刊『現代青年』に「魯迅先生を歓迎す」（鳴鑾），「魯迅の髭」（陳寂）と「中山大学学生歓迎会における魯迅先生の講演」（林霖記録，二回連載）と魯迅の写真を2枚掲載した。
- 5) 中国現代文学運動・論争・社団資料叢書『創造社資料』によれば，創造社出版部の設立日に関しては，北京支部は1926年2月23日；3月中に，武昌，綏定，揚州，長沙支部および日本の東京と京都の2支部；上海支部は同年4月1日；広州支部は4月12日となっている。
- 6) 王廷芳「光輝的一生，深切的懷念」，四川人民出版社1980年6月発行『郭沫若研究論集』3頁。
- 7) 大久保泰著『中国共産党史』上巻120頁，原書房昭和46年4月発行。
- 8) 1925年12月2日付『広州民国日報』記事「国民政府が広大学長鄒魯を罷免，その陰謀

- と罪状を告示」による。罷免令には、鄒魯の罪状は次の通りである。① 北京ででたらめな文章、そして11月27日に教職員学生への公開状を発表し、デマを飛ばして大衆を惑わしたこと。② 政府が教育資金の一本化を邪魔していると誹謗したこと。③ 学長在任中大学の財政状況を政府に全く報告しなかったこと。政府予算の用途不透明なこと。それを利用して個人勢力の拡大を謀り、中央執行委員会政治委員会および政府の財政政策が「共産」だと中傷したこと。
- 9) 李大釗推薦説は山田辰夫編『近代中国人名辞典』229頁によるものである。
 - 10) 上海教育出版社1983年11月第一版『中山大学校史』によれば、楊寿昌氏が広東大学初代文系院長を務めていたという。
 - 11) 4月29日付広東省教育会評議会が国民政府教育行政委員会会長汪兆銘に提出した報告書を見ると、上申書を受け取った広東省教育会評議会が一時的にストライキをやった一部の教員の肩を持っていたことと政府教育行政委員会の曖昧な態度などは彼らがさらなる大胆な行動に出る原因でもあった。
 - 12) 龔繼民・方仁念共編『郭沫若年譜』191頁には「郭沫若が広東大学を発った後、文系院長の職務は王独清によって代理される」となっている。しかし、『中山大学校史』の付録1「中山大学歴任学長、教務長、各学院院長氏名」には郭沫若の後任が傅斯年となっている。王独清という氏名の記載は無い。26年7月の『広州民国日報』は全部欠けているので分かりにくいだが、9月7日の「中山大学改革の進展—各系主任凡そ決定」という記事の「文科、文学系主任兼秘書王独清」という記述内容から見て、王独清が務めたのは文系院長の下にある国文学部長であった。その椅子は翌年2月から新しく来た魯迅が座るようになった。
 - 13) 中山大学改名政府令は26年8月18日『広州民国日報』に発表された「中華民国国民政府令」によるものである。上海教育出版社1983年11月出版した『中山大学校史』11頁には「国民政府は1926年7月17日に命令を發布し、広東大学を中山大学に改名することを告示した」と記載されているが、明らかに間違いである。「Sun Yatsen」は孫文の雅号の「孫逸仙」の広東語発音表記である。
 - 14) 1924年11月11日、孫文は馮玉祥に合うため広東大学創立式典に出席できなくなったので広東省省長の胡漢民に祝辞を読み、そしてわざわざ書いた「博学審問慎思明辨篤行」という「十字校訓」を贈ってもらうことにした。その校訓は『中庸』第20章にある「博学之、審問之、慎思之、明辨之、篤行^{ひろ}之（博くこれを学び、審^{つまび}らかにこれを問い、慎んでこれを思い、明らかにこれを辨じ、篤くこれを行う。）」による。
 - 15) 「青天白日満地紅」の一句はその後郭によって北伐革命軍軍歌に使われた。その軍歌の歌詞は次の通りである。「青天白日満地紅、北伐打冲鋒；国民革命不成功、永不回広東。哦、弟兄，弟兄，大家齐奮勇，大家齐奮勇。（香港『中国民主評論』〈郭沫若言行小記〉、1966年6月1日）
 - 16) 民徳出版社昭和63年11月30日3版中国古典新書『書経』120頁。漢籍の原文は台湾中央研究院「漢籍電子文献」（瀚典全文検索系統1.3版1997年11月）『十三経』によるものである。
 - 17) 辛亥革命直前（1911年4月27日）、同盟会一派が広東省城を占拠し、揚子江一帯に出撃しようとはかったが、目的が達成できず、敗走した暴動事件。

- 18) 『郭沫若年譜』では、郭沫若が同大会に出席したのが25日となっている。実際は、25日に開かれたのが準備会であって、郭沫若が出席した記録はない。その日、発足大会の開催日を5月29日に決めた。ここで、『郭沫若年譜』にある記載の間違いを訂正する。
- 19) 沙基事件：上海で起きた五・三〇事件に刺戟され、1925年6月23日中国の広州市沙基で反英デモが行われた。デモ隊が沙基に着いた際、イギリス兵が突然発砲し、デモに参加した中国人に52人の死亡者、100余りの重軽傷者が出た。「沙基虐殺事件」ともいう。